

## ピーマン（促成）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12		
作 型	//////////							○	—	○○	—	◎	//////////	
主な作業						収 穫 終 り		播 種		定 植		カ イ テ ン 張 り	収 穫 開 始	追 肥 開 始

ピーマン ナス科、原産地：南アメリカ

(pH6.0前後)

作物名 ピーマン

学 名 Capsicum annuum L.

作 型 促成

### 4 施設装備

- (1)連棟型ハウス
- (2)加温機

### 5 経営目標

- (1)収量 10 t / 10 a
- (2)投下労働時間 630時間/10 a
- (3)所得率 40%
- (4)経営規模 40 a  
(家族労働力2人の場合)

## 技術体系

### 1 作型の特徴

育苗が高温期のため、軟弱徒長となりやすく、がっちりした苗づくりが必要である。

また、栽培が長期に渡り、冬越し栽培となるので、最低気温18℃程度を目標とし、生育と結実を順調に行わせることが大切である。

### 2 適応地域

平坦地域

### 3 栽培条件

#### (1)温度

果菜の中で最も高温性で、発芽適温は25～30℃とされ、冬季は18℃を目標として加温する。

低温では、生育、収量、品質の低下をきたす。

また、35℃以上では着果の阻害、変形果が増加しやすい。

#### (2)光

光飽和点は3万ルクスと果菜類のなかでは低い。

#### (3)土壌条件

栽培期間が長いので、保水性、通気性に優れた肥沃土が良く、土壌反応は微酸性が適する。

## 栽培技術

### 1 品種と特性

「ニューエース」

中肉中獅子型。

低温少日照および高温乾燥条件下における着果・肥大性に優れ、草勢はやや強く、枝の伸長が安定しているため、不良環境下でも成り休みが少ないが、大果収穫となるため、整枝を早めに行い、過繁茂にしないことが大切である。

「かがやき」

中型種、濃緑でテリがあり、PMMoV(旧TMV-p)抵抗性の中早生種で青枯病等土壌病害にも比較的強い。低温少日照および高温乾燥条件下における着果・肥大性に優れ、草勢はやや強く、枝の伸長が安定しているため、不良環境下でも成り休みが少ない。

## 2 育苗

### (1) 育苗施設

雨よけハウス（天井ビニル、サイド寒冷紗）を利用して苗づくりをする。苗床面積は10a当たり100～150m<sup>2</sup> 準備する。

### (2) 播種

播種量は10a当たり40mlとし、播種前に条間10cm、深さ0.5cmのまき溝をつくり、約1cmの間隔で、8月上旬頃に播種し覆土する。25～30℃で4～5日で発芽するため、発芽したら、ぬれ新聞紙は除去する。

### (3) 鉢上げ

本葉が見え始めた頃から1.5枚位の間に鉢上げを行う。鉢の大きさは、直径12cmポリポットを用いる。

### (4) 水管理その他

高温期で乾燥しやすい時期なので、少量多回数灌水を基本とし、夕方まで余分な水を残さないようにする。また、生育に応じて鉢ずらしを行い、採光をよくし、多湿（むれ）による軟弱徒長を防ぐ。

## 3 本圃の準備

### (1) 施肥

施肥、苦土石灰は、土壌消毒前に全面施用し、2回程度耕起しておく。その他の肥料は、定植1週間前に施用する。

【 施 肥 量 】 (Kg / 10a)

	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	備 考
基 肥	30	45	30	完熟堆肥2t
追 肥	20	10	20	苦土石灰
全 量	50	55	50	100～200Kg

### (2) 栽植様式

畦幅150cmの場合 株間55cm(1条植え)

(1, 212株 / 10a)

畦幅180cmの場合 株間50cm(1条植え)

(1, 110株 / 10a)

### (3) 天井ビニル張り

定植1週間前には、天井ビニルを張っておく。

## 4 定植

定植苗の大きさは、本葉8～9枚で第1番花が開花直前のものを植える。

## 5 定植後の温度管理

### (1) サイドビニル張り

夜温が20℃を下まわる頃になったら、サイドビニルを張り保温する。

### (2) 温度と湿度管理

温度は、日中25～30℃、夜18～20℃を目標とする。特に低温期は温度に注意し、生育不良や落果を防止する。

### (3) 灌水

定植から生育量に合わせ灌水する。

低温期の灌水は、病害の発生を防ぐ意味からもやや控えめにする。

### (4) 追肥

追肥は生育状態をみて加減する。通常は1回目を年内に施用し、2回目からは20～30日間隔で3～4回行う。また、4月以降については、灌水を兼ね液肥を定期的に施用する。

### (5) 誘引と整枝

定植後、苗が倒れないように仮支柱を立て誘引する。第1分枝部までの側枝は除く。草勢がつきやすい時期なので1番果は、生育状況やほ場条件を考慮して摘果する。強い枝を4本選んで誘引する。これを着果枝とし、V字型に糸で誘引し生育を揃える。

また、内側の側枝は採光をよくするため、適時摘心摘葉する。誘引した主枝が頂点まで達したら、生長点を摘心する。伸びの良い側枝は、3～4節で摘心し、収穫の終わった側枝は1節残して切り戻す。

### (6) 摘果

変形果、奇形果、病虫害果は、草勢の負担にならないように早めに摘果する。

## 6 収穫

収穫開始は、定植後、20～25日頃となる。

草勢に応じて、収穫時の果実の日齢を調整すると草勢管理や連続収穫に役立つ。

## 7 PMMoV（旧 TMV-p）対策

PMMoV については、土壌伝染する他、樹液による感染力も強いため発病すると大きな被害を受ける。

初期の感染はアブラムシによるところが多いため、害虫防除の徹底を行うと共に、発病株については早めに抜き取り適正に処分する必要がある。

発病は場では抵抗性品種の作付けが望ましい。